

<書籍紹介>

河合洋尚・松本雄一・山本睦 編

## 『景観で考える——人類学と考古学からのアプローチ』

臨川書店, 京都, 2023年, 280頁, 4,000円(+税)

佐藤吉文

東亜大学芸術学部アート・デザイン学科  
yosyfumi75@toua-u.ac.jp

### 《要旨》

人間と環境, 文化と自然という対立図式に収まりきれない「世界」に注目することは, 存在論的転回を経た人文諸科学の前提となっている。そのような状況において, あえて「景観」を冠に掲げる人類学や考古学は何を意図しているのだろうか。本書は, 5名の人類学者と7名の考古学者がその疑問を解消して「景観」研究の意義を提示する試みである。

キーワード: 景観, 現象論的アプローチ, 人類学, 考古学

本書は, 文部科学省研究費助成事業・新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明」の研究結果出版物の一つである。人間と環境, 文化と自然という対立図式に収まりきれない「世界」に注目することは, 存在論的転回を経た人文諸科学の前提となっている。そのような状況において, あえて「景観」を冠に掲げる人類学や考古学は何を意図しているのだろうか。本書は理論的枠組みを整理した第Ⅰ部「景観という視座」(全2章), 考古学分野の論文を収めた第Ⅱ部「環境・記憶・モニュメント: 景観で考える考古学」(全6章), そして文化人類学分野の論文を収めた第Ⅲ部「認知・言説・マテリアリティ: 景観で考える人類学」(全4章)の三部構成をとりながら, 12人の研究者がその疑問を解消して「景観」研究の意義を提示する試みである。また, 異分野を専門とする研究者が同一主題のもとに集うことで, そこに「化学反応」の起こりを目論んだものでもある。以下では, 各章の概要をしめしながら, その内容を紹介したい。なお,

各章紹介にあたり, サブタイトルを省略したことをあらかじめお断りしておく。

序章「人類学と考古学の景観論」(河合洋尚・松本雄一・山本睦)では, 景観という概念を介して社会・文化人類学と考古学が対話を図るにあたって, それぞれの分野における景観論の動向を整理し, 両者の協働関係といま取り組むべき課題が示される。視覚中心主義から行為中心主義へのシフトを提起した景観論を人類学者インゴルドがWorld Archaeology誌に発表して以来, 主体/客体, 文化/自然といった西洋二分法を乗り越え, 人と周囲環境の絡み合いによって生成される物質的形態として, 「景観」が対象化されている。その研究群は, その場に住まう者の視点で了解される世界のダイナミズムを把握する試みであり, 人類学や考古学を隣接諸分野へと開く意義を備えている, と著者らは主張する。そして日本において景観論の展開を図るうえで, いま必要なのは景観「で」研究する意義を説くことだと主張する。

続く第Ⅰ部第1章「『景観を』ではなく『景

観で』考える」(大西英之)では、人類学および考古学において、「景観で」研究すること、すなわち景観を分析概念と位置づけることの意義が論じられる。著者は、環境生態学や「環世界」論など、人文社会／自然科学における人間と環境の関係をめぐる問題系を広く視野に収めつつも、インゴルドやアパデュライの議論を下敷きにして、景観を「人間の認知と行動に基づく、物質的かつ精神的な環境＝世界にたいする働きかけの結果構築された文化的歴史的所産」(p.36)と定義する。それは、時間的にも空間的にもモノや情報がひとの生活実践や認知を介して重層的かつ多面的に一体を成しつつ変化を繰り返す実態であり、人類学や考古学を異分野連携に拓き、応用研究の実践と交差させるその見方を景観研究の意義と位置づける。

第2章「現代人類学で景観を問う意義を考える」(河合洋尚)では、序章で提起された二つの問題、すなわち①景観概念を導入する意義と②その導入によってもたらされることになる新たな知見、をめぐる景観人類学者の回答が、中国の都市計画や久米島を事例に論じられる。西欧的二分法を超越した「世界」の把握を近似的に試みる存在論人類学と対比しながら、著者は人類学において景観を論じる意義を生活実践を介して人が形成していくその物質的形態への着目—マテリアル・ターン (p.51)—におく。と同時に著者は、それだけでは不十分な事例を自身の調査から示す。そして、視覚イメージやグローバルな政治経済など多様なヒューマンインパクトを景観形成要因として視野に含めた分析が求められると主張する。

第Ⅱ部に入り第3章から第5章までは、南米大陸太平洋岸を南北に走るアンデス山脈を舞台に、16世紀前半にスペイン人によって征服されるまで興亡した諸文化、すなわちアンデス文明を特徴づける神殿をめぐる課題を、それぞれの著者が景観論の視点から考古学的に論じる。

聖性付与による集団的な記憶とアイデンティティの生成装置としてモニュメンタリティをとらえる立場にたって神殿の萌芽要因を検討する第3章「景観で考えるモニュメンタリティ」(荘司一步)では、ペルー北海岸クルス・ベル

デ遺跡の神殿出現直前期を事例に、廃棄された生活残滓が徐々に堆積してマウンド状に積み重なる景観を漁撈民のさまざまな行為からなるタスクスケープへと解きほぐす。著者は、エル・ニーニョ現象の頻出が生態系と食生活の変化を招くのと並行して生じた、マウンド内への死者の安置や繰り返される燃焼行為と粘土をつかった床敷に人工的空間の積極的創出を見出し、そこにのちの神殿出現の萌芽を読み取っている。

第4章「自然地形から神殿へ」(松本雄一)では、クリストファー・ティリーの「飼いならされた自然」としてのモニュメント理解を導き手に、ブルデューやギデنزの実践論／エージェンシー論とアルフレッド・ジュルの「もののエージェンシー」論を巧みに接合しながら、アンデス文明形成期の神殿カンパナユック・ルミ遺跡での発掘調査データにもとづいて、人とモニュメントがタスクスケープとしての神殿を創出、維持、放棄の過程で互いに関わりあう状況を具体的に論じている。その議論は、生活実践を強調することでインゴルド的景観論が見落としがちな外部社会との交渉や大規模な築造行為が／を生み出す権力の作用を射程に含めるとともに、神殿放棄から1000年を経て形成期の神殿が「聖なる場所」へと変貌する景観のテンポラリティへと接合することで、しばしば特定の時代に閉じてしまいがちな形成期神殿研究を開く意義をもっている。

第5章「景観をめぐる時間の多様性」(山本睦)では、発掘調査資料のみならず、踏査で得られた多様な地理情報と神殿周囲に分布する他のセトルメント(主に集落遺跡)の立地パターンにもとづきながら、ペルー最北部の山地に暮らした人びとが形成期神殿インガタンボと周囲の環境を、生活実践を介してどのように物質的形態として景観化したかが、社会的記憶を手がかりに論じられる。著者は、儀礼を通じた社会統合の核である神殿で交錯する人や物資や、情報を運ぶ移動ルートを、人間と地形といった物理環境が交渉することで成立した景観としてだけでなく、神殿を地域社会へと取り込む景観と位置づける。そして社会的記憶が埋め込まれた神殿跡地が、放棄から1500年以上を経て再び

人びとの景観のなかに浮かび上がる様子が示される。

第6章「火山灰が創る景観」(市川彰)では、中米エルサルバドルのサン・アンドレス遺跡での発掘調査にもとづいて、地域の住民やのちに北方からの移住してきた新たな定着民が、イロパング火山(後420～540年頃)、ロマ・カルデラ火山(後620年頃)、エル・ボケロン火山(後1050年頃)の三度にわたる噴火という自然災害のたびに、事後の生活阻害要因であった火山灰と、灰の化学的性質や身につけていた技術にあわせて異なる交渉を試みる過程が考古学的に示される。そこでは、聖なる山を模したピラミッド型大型建造物内部の充填材や日干しレンガを覆う泥漆喰の混和材、凝灰岩ブロックとして、生活景観のなかに火山のある景観を位置づけていく歴史的過程を、ひととモノの間に生起する双方向的かつ偶発的な関係の束＝アセンブリッジとして論じている。

第7章「絡み合いの景観論」(山口徹)では、「ともにあること」で自分自身が自分になっていくというインゴルド流の社会関係理解を踏まえながら、ポリネシアの北部クック諸島のひとつ、トンガレヴァ環礁でみられる祭祀場マラエをめぐる景観が民族考古学の視点から「経験された景観」として示される。そこでは、パンダナスの藪のなかに島民が平板状のサンゴ石を縁石として並べ、一部にビーチロックを切り出した立石を組み込んで区画となした祭祀場マラエをめぐる状況を、19世紀半ばにアメリカの貿易商人ラumontが座礁の末に上陸し、島民と暮らしながら記した手記の記述と自身の大学院生時代の調査経験を交錯させることで、島の各地に暮らした島民が儀礼的实践を介して異なる距離感で経験した景観として描出している。

第8章「考古学における景観概念を捉えなおす」(寺村裕史)では、人間と物的対象との関連において視覚環境として認知され、人為的に操作される文化的所産として、関連諸学とくに工学的景観論と考古学における景観概念を整理しながら、GIS(地理情報システム)とコンピュータを援用した眺望景観分析や可視範囲分析の研究例を介して、過去の人びとの視点にたっ

た周囲環境への働きかけや空間認識の仕方を人間と環境の分かちがたい関係を分析者の主観を排して把握する手法が示される。景観が人間の営為と自然の諸力によって絶えず変化する以上、過去の景観復元にはたえず精度の問題がつきまとう。しかし地表の姿として把握可能な環境の物理的側面と、それを認知する人間の認知領域を統合的に考察するその理論的枠組みは、考古学と関連諸学の領域を横断した研究を促し得ると論じる。本章は、考古学的景観論と第3部の人類学的景観論を架橋する役割も担う。

第9章「霊感との呼応から創出される景観」(清水郁朗)では、ラオス南部において人に取り憑いた悪霊ポープを浄化できる場所として著名なメコン川沿いの集落を舞台に、霊的世界を含んで成立するポープのいる現実として景観が現出する様相とそのなかに住まう人びとの姿が、ある女性が霊媒になるまでのライフヒストリーと、悪霊を恐れ彼女を頼る人びとの依頼を受け催される浄化儀礼を中心に据えながら、民族誌的に記述される。そこでは、一見して特徴乏しい儀礼の舞台となる霊媒の自宅や、儀礼で被術者から悪霊を浄化する水、浄化をさらに進めるために訪れる集落南側の池と隣接して立つ祭祀小屋、そしてメコン川が、悪霊ポープを畏れる人の精神や心性と混淆して立ち現れている状況を統合的に考察することではじめて、景観を構成する個々の要素の意味を考えることができると論じられている。

第10章「景観の物語を物語る」(後藤正憲)では、景観に「住まうこと dwelling」の運動性が、東シベリアに暮らすサハ人が牧草地アラスとして利用するサーモカルストをめぐる景観とヴォルガ川中流域のチュヴァシ人がイスラムやキリスト教の影響を受けながらも維持してきた在来の精霊信仰が現出する景観を事例に、論じられる。そこでは、人間の居住や利用を基準とした「故郷の土地」と「川の源流」という対立的な価値づけが人間の利用の過程で反転しうる表裏一体的な認識や、治病師の助力をへて精霊を頼った篤信的キリスト教徒である老女を襲った末期の子宮癌と第二次大戦のさなか薪採りに入った山を生理で穢した畏れの記憶

が、牧草地アラスや、精霊キレメチとされる美しくも気味の悪い巨木を取り巻く景観を、ありえる未来／ありえた過去の状態を含めた奥行きある存在として作り上げている状況が示される。

第11章「景観とイマジネーション」(古川勇氣)では、非西洋の現実に対して絶対的な差異や他者性を措定してきた近年の存在論的人类学に警鐘を鳴らす試みとして景観人類学を位置づけながら、多くの民話を介して遺跡や地形とコスモロジーが交渉した景観を共有するペルー北部山地、バンバマルカの住民への聞き取り調査で得られた真夜中や暁闇での「よくないもの」との遭遇体験を、景観に対する人間のイマジネーションと景観のアフォーダンスの絡まり合いとして読み解いている。そこで著者は、人間の知覚や想像力を非西洋の「存在論的」現実接近する手段として位置づけるとともに、認知能力こそが景観が動態として駆動するための「余白」を生み出すのだと主張する。

第12章「視覚イメージと言説実践」(辺清音)は、高度経済成長期の日本で、地域の特色を示す街並み保存を意図した運動をうけて成立した都市型景観条例の下、法律や条例、都市計画のなかで選択的に形成、再生産された視覚イメージと当事者たる地元民の手でそれを現実の物質へと転換していく言説実践が、1970年代以降日本を代表する華人街として神戸南京町を

形成する過程で地域住民や部外者に地域の文化表象として内面化され、阪神・淡路大震災被災後の地域住民の生活再建と復興事業を支える柱を為すに至る過程を民族誌的に詳述する。景観人類学において視覚イメージを扱う研究は減少傾向にあるが、著者は、地域住民が視覚イメージを積極的に操作し振る舞う状況では有効な分析視点だと主張する。

以上が本書の概要である。本書は、考古学者と文化人類学者が共同で研究会を組織し、欧米の例に倣って両分野を景観論で架橋することで、分野を横断して対話を試みた本邦初の書籍である。とりわけ、「景観」とは何かを現象学的アプローチという点に主眼を置きながら整理し、「なんでもかんでも景観」という従来見られた理解(誤解)を読者が改める契機を生み出した意義は大きい。もちろん、「あとがき」において共編者のひとりが述べるように、景観を造り、景観に造られるノンヒューマンなどの他のアクターの存在や、先行研究として紹介されながら本書では直接的に扱われない星空などの空景観を含めたかたちで景観をとらえた論考が認められないなど、動物シンボリズムや考古天文学に関心をもつ評者として叶えられなかった期待はある。しかし、各章を通して、本書序論で掲げられた2つの課題は十分に達成されたと言えるだろう。これからの「景観」研究の出発点として必読の一冊である。

Book Presentation

KAWAI, Hironao, Yuichi MATSUMOTO and Atsushi YAMAMOTO(eds.)

Thinking by the Landscape: Approaches from  
Anthropology and Archaeology

Rinsen Shoten, Kyoto, 2023, p.280, JPN4,000(+tax)

Yoshifumi SATO

Faculty of Art & Design, University of East Asia  
yosyfumi75@toua-u.ac.jp

Summary

An ontological turn in the humanities emphasizes the importance of paying attention to the 'worlds' that do not fit into the oppositional framework of human and environment, culture and nature. Under such circumstances, what the landscape anthropology and archaeology tell us about such worlds? This book is an attempt by five anthropologists and seven archaeologists to resolve this question and present the significance of "landscape" studies.

Keywords : Landscape, phenomenological approach, anthropology, archaeology